本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。
著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：
UTokyo Online Education　学術フロンティア講義　2024S　石井 剛

2024年度学術フロンティア講義/高度教養特殊講義（東アジア教養学）

「30年後の世界へ——ポスト2050を希望に変える」

希望のロゴス

危機における「生」について人類の智慧が教えてくれること

石井剛（Ishii Tsuyoshi）

2024年7月12日

わたしたちはどのように
人間であるべきでしょうか？

生生之谓易

『周易』繫辞上

フランツ・カフカ『変身』

グレーゴル・ザムザは誰か？

ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変っているのを発見した。彼は鎧のように堅い背を下にして、あおむけに横たわっていた。

（新潮文庫版、1952、p.5）

すべて人は、いかなる場所においても、法の下において、人として認められる権利を有する。

「世界人権宣言」第6条

西洋とその残余

West and the Rest

酒井直樹先生

植民地/帝国主義

ホロコースト（ショアー）

731部隊の生体実験　　etc.

すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

「日本国憲法」第25条

1　技術と復興

もっぱら自分からのみ人間にほかならぬ者であるような、そのような人間は存在しない。

マルティン・ハイデッガー「技術への問い」
（『技術への問い』関口浩訳、平凡社、2009、p.52）

インフラストラクチャー
としての人間

礼学としての技術論

ハイデガー「技術への問い」

M.ハイデガー『技術への問い』関口浩訳、平凡社、2009

- 「現代技術については、ふつう、正当にも、より古い手仕事的な技術と比較してなにかまったく異なるもの、したがって新しいものであると主張される。」（9ページ）
- 「いっそううまく使いこなそう」とする意志（10ページ）
- 「開蔵（Entbergen）」
- 「アレーテイア（άλήθεια）」
- 「集-立（Ge-stell）」

ハイデガー「技術への問い」（承前）

M.ハイデガー『技術への問い』関口浩訳、平凡社、2009

- 「技術を道具とみなすかぎり、われわれはそれを操ろうという意志に固執したままにとどまる。その場合、われわれは技術の本質のかたわらをさまようのである。」（54ページ）
- 「技術の本質はけっして技術的なものではないのだから、技術への本質的な省察と、技術との決定的な対決とは、一方では技術の本質に親しいが、他方ではそれと根本的に相違するようなひとつの領域で生じる。そのような領域が芸術である。」（59ページ）
- われわれが危険に近づけば近づくほど、それだけ救うものへの道は明るく光りはじめ、それだけいっそうわれわれはよく問うようになる。（60ページ）

２　ロゴスと道

初めに言（ことば）があった

『新約聖書』ヨハネによる福音書 1:1

道可道非常道

『老子』第1章

思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

魯迅『故郷』（『阿Q正伝・狂人日記　他12篇』竹内好訳、岩波文庫、1955、p.99）

形而上者謂之道,
形而下者謂之器。

『周易』繫辭上

陰　陽

木、火、土、金、水　（五行）

存在は未来的である

天理
時勢

汪暉『近代中国思想の生成』
石井剛訳、岩波書店、2011

分解の哲学

藤原辰史先生

Well-being?

３　養生の技術

――惑星時代を生きる

『荘子』斉物論
物化

「庖丁」のものがたり

『荘子』養生主

　庖人の丁がある時、文景君のために牛を料理して見せた。丁の手が触れた部分、肩にもたせかけた箇所、足で踏みつけたところ、膝で押さえつけたあたりの肉が、あるいはぱりぱりと、あるいはさくさくと、心地よい音とともに切り離されていく。さらに牛刀を振るえば、ばりばりと響き渡り、どれ一つ調子外れの雑音はない。（中略）感動した文景君が、思わず声を発した。「ああ、見事だ。技もこれほどまでになるものか。」

庖人の丁は、刀を置いて次のように答えた。

「私の好んでいるのは道であって、技以上のものであります。ところで、私が牛の料理を始めたばかりの頃は、目に入るものは何でも牛に見えたのであります。それが三年も経つと、最早牛の全体は全く目に映らず、刀の入れ所だけに目が行くようになりました。そして今では、内面の霊妙な働きで以て牛に向かっており、目は使いません。一切の感覚・知覚がすべて停止して、霊妙な欲求が無意識のうちに働き出すのです。かくて私は、刀を牛体の自然の筋目に沿って動かし、大きく空いた肉の隙間に打ち込み、大きく穿たれた骨の穴に導き入れるのですが、牛体の本来の成り立ちに従っているにすぎません。かような次第で、私の技で、骨と肉の絡み合った難所に刀がぶつかることは、いままで一度たりともありませんでした。ましてや、ねじ曲がった大骨など、擦ったことさえありません。腕のよい庖人でも、一年ごとに刀を取り替えます。肉を切り裂いて刃こぼれしますから。並の庖人となると、毎月刀を取り替えます。骨を叩き切るからであります。しかし、私の刀はかれこれもう19年、料理した牛は数千頭にもなりましょうか。それなのに、刀はたった今砥石から降ろしたばかりのように、刃こぼれ一つありません。もともと牛の骨節というものには隙間があり、刀の刃というものには厚さがない。厚さのないものを隙間のあるところに入れるのですから、刃を気ままに遊ばせるにも広々として、必ずゆとりのある道理であります。かような次第で、かれこれもう19年使い続けておりますけれども、刀はたった今砥石から降ろしたばかりのようで、刃こぼれ一つないのです。

ユク・ホイ

『中国における技術への問い』

「宇宙技芸」cosomo-technique

「機心」を恥じる

『荘子』天地

子貢は南へ行って楚国に遊び、晋国に帰る途中漢陰を通ったときに、一人の老人が畑で穴を掘って井戸に入り、甕を抱えて水をまいているのを見た。バシャバシャと力を使っているのに効率は悪そうだった。子貢はそこで尋ねた。「そこにある機械を使えば一日で百もの畑に水をやれます。少ない力で大きな効果が得られるのに、あなたは使いたくないのですか。」その老人は彼を見上げていった。「どういうことだ。」子貢が言った。「木を穿って機械をつくって、後ろを重く前を軽くすれば、水を運ぶのも吸い上げるようにできるので、まるで沸騰したお湯のようにすばやくあふれてきますよ。それを「槹」と呼びます。」その老人は怒りの色を浮かべたがなおも笑って言った。「わたしは師匠からこう聞いている。機械を持てば、必ずや機事がうまれ、機事が生まれれば、必ずや機心が生まれるのだそうだ。機心が胸の中にあるようでは真っ白なままではいられないし、真っ白なままでいられないなら精神も落ち着かない。精神が落ち着かないようであれば、道におさまることはできない。わたしは知らないのではないが、恥ずべきことなのでやらないのだ。」

「渾沌の術」

『荘子』天地

彼は渾沌の術を修練しているのです。それが純一であることをわかっているので、二つに分けられることを知ろうとはしない。修練するのは内なるちからであって、外に向かうちからではない。〔中略〕あなたが驚くのも無理はない。しかも渾沌の術などはわたしやあなたに理解できるものではありませんよ。

渾沌

『荘子』応帝王

南海の帝を儵、北海の帝を忽、中央の帝を渾沌という。儵と忽は時々渾沌の地でいっしょになったが、渾沌はとてもよく彼らをもてなした。儵と忽は渾沌の徳に報いようと考えて言った。「人は誰でも七つの穴があって、視たり聞いたり食べたり息をしている。だが彼にだけはそれがない。試しに穴を穿ってみるのはどうだろう。」そうして一日に一つ穴を掘っていくと、七日目に渾沌は死んだ。

「すばらしい！わたしは丁の話を聞いて養生を得たぞ！」

文景君

パッシビズムの技術

高木仁三郎『原子力事故はなぜくりかえすのか』岩波書店、2000

　小さな事故はともかくとして、原発が本当に深刻な事故に至った場合に、人為的な判断で、外からダイナミックな装置を介入させてシステムを止めるとか、緊急冷却水を送り込んで原子炉を冷やすというようなことではなくて、本来的に備わった安全性――パッシブ・セーフティーと言われています――によって暴走を止めるようなあり方のほうが望ましいのではないかということです。つまり、危機状態が起こったときに、たとえば原子炉の温度が上がってくれば自然と反応が下がるような、あるいは反応度が上がってくればフィードバックが働いて反応度が下がるような、そういうフィードバックによって原子炉が止まる。あるいは、安全システムも、危機状態のときにモーターなどを使って人為的で動的な介入をして安全を確保するようなことをやると、モーターが動かないときはどうするのかという問題が必ず出てきますから、そうではなくて、危機状態になったら必ず、たとえばもっと強力な自然の法則、重力の法則が働いて、それによって制御棒が挿入されるというような、そういった本来的な安全性が働くような形のシステムであったほうがよいということです。（p. 177–178）

七十而從心所欲，不踰矩。

『論語』為政

未知生，焉知死？

『論語』先進

野合而生孔子（『史記』孔子世家）
四體不勤五穀不分（『論語』微子）

前未来形／悲嘆可能性

岩川ありさ先生

ロゴスと道
翻訳の可能性／不可能性

鳴謝

この授業を共に作った人々

- UTokyo OCW（大総センター）　蒋妍、中谷静乃、湯浅肇、三野綾子、加藤菜穂、山本直美、佐藤芙美、古田紫乃
- EAA　渡辺理恵、金子亮大、汪牧耘、郭馳洋、張政婷、深田めぐみ
- EAAリサーチアシスタント　銭俊華、林子微、新本果、白尾安紗美、席子涵、張子一